

日本教育方法学会 第59回大会 課題研究I (2023.10.13) 慶應義塾大学  
教育方法学の知を共有する—知のメディアとしてのジャーナルを問う

# 教育学会ジャンル論あるいはジャーナルの言語学

—マルチモーダルな時代における知の媒体と文体の民主的機能—

南浦涼介 (広島大学)

# 問題の所在：

「ジャーナルに論文を書く」以外のかたちで私たちは知見を伝えられているか？

社会

学会

例えば

文字と文章で埋め尽くされた  
スライド・プレゼンテーション

例えば

大量のフルペーパーのレジюме  
を読み上げる発表スタイル

例えば

文章による知識提示と論理展開  
で構成される大学入門教科書

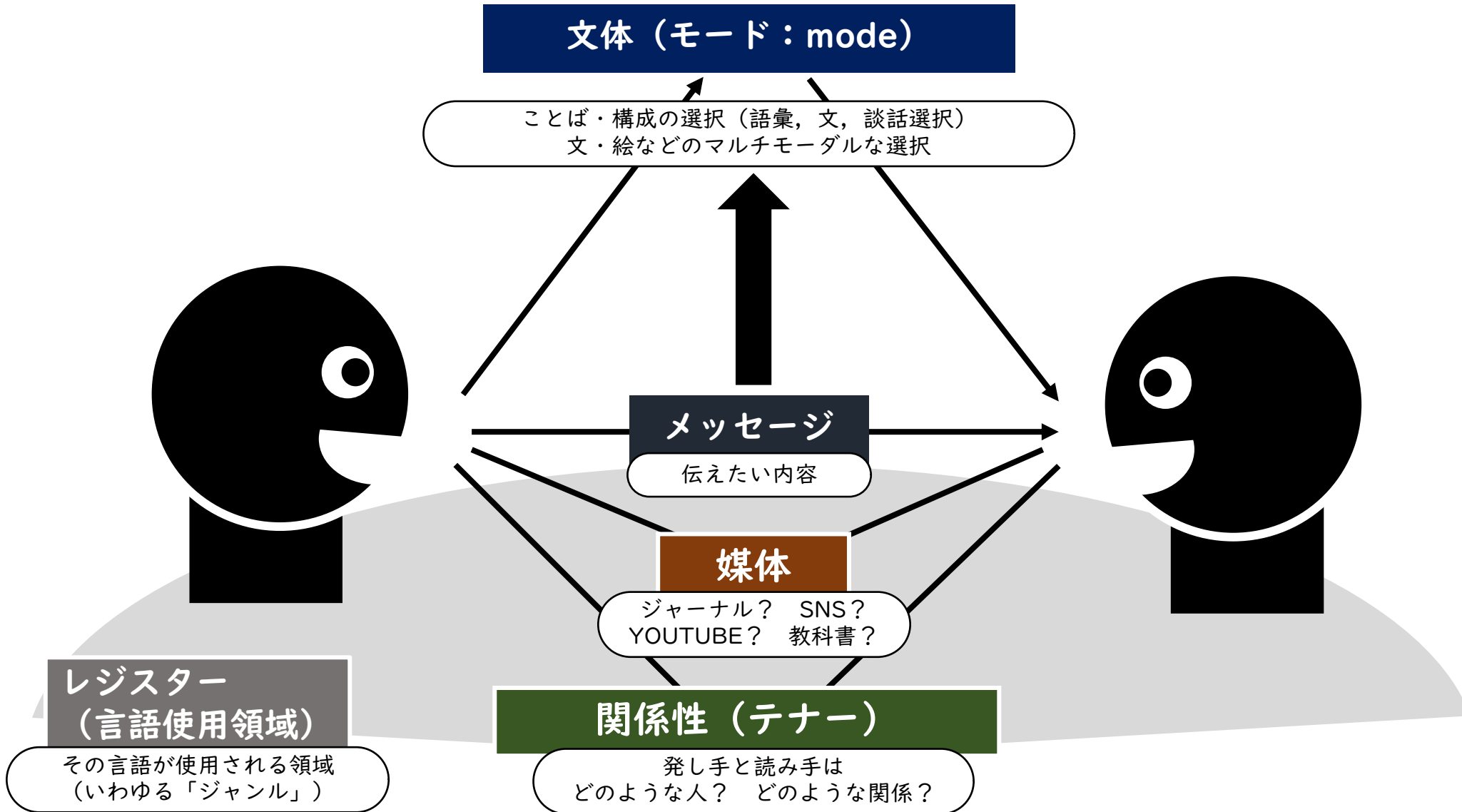
選択的体系機能言語学の側面から、ジャーナルとは異なる媒体における知見の提示とその葛藤を示す

こうした学会やそこに所属する研究者の研究の表象のしかたはどう決まっているのか？

オープンアクセス化や学会・研究者の社会的責任の拡張の中で、いかなる媒体と文体の選択が必要になるのか？

そうした新しい媒体において研究知見を載せる文体選択の難しさは何か？

# 選択的体系機能言語学



選択体系機能言語学 (SFL: Systemic functional linguistics) は、イギリスの言語学者のハリデー、M.A.K.が1970年代後半から提唱した言語学概念である。著作は “The Collected Works of M.A.K. Halliday” で全10巻が出版されている。近年、移民の言語教育をはじめ、言語教育への応用的な視点や社会と言語の関わりから評価され、近年もハリデーの視点を拡張させて議論がされている。例えば、シュレツペグレル, M. 『学校教育の言語—機能言語学の視点から』くろしお出版, 2017年, 照屋正博 『意味がよくわかるようになるための言語学—体系機能言語学への招待』くろしお出版, 2022年 など。

# 聞き手と読み手、媒体と文体の安定性と不安定性

選択的体系機能言語学の側面から、ジャーナルとは異なる媒体における知見の提示とその葛藤を示す

## 事例① LINEの教育記事における知の共有と葛藤

教育出版からの依頼

教師の多忙化の中でLINEに配信するタイプの記事で  
外国人児童生徒教育の研究知見を提示できないか？

## 事例② 大学院生のリーフレット作成活動（制作過程）

大学院における授業活動のアウトプット

- 「外国人児童・生徒の教育課程デザイン論」
- 多様な学科から集まってきている  
外国人児童生徒教育についての経験や知見はない人もる
  - ① 外国人児童生徒教育の研修動画の批判的検討
  - ② Handbook of Research on Engaging Immigrant Families and Promoting Academic Success for English Language Learnersの輪読
  - ③ 知見を社会的発信をする際の文体の検討

選択的体系機能言語学をもとに  
メッセージ、モード、媒体、テナーの関係から検討

オープンアクセス化や学会・研究者の社会的責任の拡張の中で、いかなる媒体と文体の選択が必要になるのか？

そうした新しい媒体において研究知見を載せる文体選択の難しさは何か？

# 事例① LINE連載記事

媒体

関係性 (テナー)

メッセージ

文体 (モード：  
mode)

全体の構成と構成要素

教育出版のLINEベースの教育記事 (もともとは800字)

(読み手) 若手の教員

外国人児童生徒を包摂する視点や具体事例, その意味

## 第8回 地域につながりをつくる、つながりの中で人を育む

広島大学大学院人間社会科学部研究科准教授  
みなみうらりょうすけ  
南浦 涼介



カトウ先生

小学校教師、採用2年め。4年生の担任。熱意で駆け回るのが得意だが、まだまだ空回り。ハヤシさんは大学時代のサークル友達でかつ相談相手。4月よりベトナムからの転校生・ミンさんをクラスに迎えた。



ハヤシさん

大学院の2年生。大学院では多様性の教育について関心をもって研究している。カトウ先生は大学時代の友人でよく相談に乗っていた。

2人の  
登場人物

会話

カトウ先生：うちの校長先生、ちょっとすごいかもしれない.....。

ハヤシさん：唐突だなあ。どういうこと？

カトウ先生：いやね。僕の学校って、別に外国につながる子どもたちが多くないし、特別に外国人が多い地域にあるわけでもないでしょ。

ハヤシさん：確かにそうだね。

カトウ先生：だから、校長先生がミンさんのお母さんのことを心配して、自治体の国際交流協会に連絡を取ってくれたんだ。そしたら、国際交流協会がベトナム語通訳のかたを紹介してくれたり、地域の中でやっている外国人向けの日本語のボランティア教室を紹介してくれたりしたんだ。

ハヤシさん：なるほど！

カトウ先生：それで、ベトナム語通訳のかたも呼んで、ミンさんも入れて3人でベトナム語でお話

会話編

こうした力はいらぬ人がそれぞれにもっておくことが重要になります。今回のように、管理職の先生は教育委員会や地域、あるいは学校間の連携も含めて密接な関係性をもっていることも多くあり、それらをアンテナのように使ってはたらきかけることが大切ですといえます。

また、同時にカトウ先生が行っていたように、保護者との地道な対話があったことが、こうした動きをつなぐきっかけとなった。下の校長先生のコメントを読んでみてください。

### 〈校長先生のコメント〉

ミンさんが学校に来ることになったとき、実は私がいちばん心配したのは、保護者のかたが地域の中で孤立しないかということでした。

保護者の人が同じ言語で安心して話せる機会をつくる必要性を感じたので、校長会などで他の学校の話聞きながら、国際交流協会に相談をすることにしたんです。

特に外国につながる子どもの保護者にとっては、電話や連絡帳によるやりとりは言葉のハードルも高くなります。お互いが勤務時間を融通できるのであれば、直接学校でやり取りすることがよいかもかもしれませんし、それが難しい場合、近年はGoogle ClassroomなどのLMS (Learning Management System) も使われ、それによって学校と保護者がつながることもできます。こうした文字によるチャットなどのやりとりであれば、教師と保護者がお互いに翻訳ツールを活用してやりとりすることもできます。また、カトウ先生が行ったように、学校行事などで見かけたときに声をかけることが大きな意味をもつことも多くあります。

日本語の先生は「やさしい日本語を使う」とか、「翻訳機を使って何とか多言語併記をする」「難しいと思う言葉づかいに気づける」ということをスキルとして持っていることが多いです。でもこうした「言語への感覚や敏感にする」ことを「日本語教師の専売特許」にしないことも大切なのです。この発想や考え方を私のような学級担任とも共有していくことができたかなと思います。



解説

登場人物による補足

解説編

注) 原稿の転載およびイラストの転載は出版社とイラストレーターからの許諾を得て掲載

連載記事はLINEで「教育出版」と「お友だち」になると、月2回配信されます。  
(直接URLの貼り付けは禁止のため)

多くの場合、学校全体で何かの対策を講じているので、想像になりがちです。確か

# 事例① LINE連載記事

媒体

教育出版のLINEベースの教育記事（もともとは800字）

関係性（テナー）

（読み手）若手の教員

メッセージ

外国人児童生徒を包摂する視点や具体事例，その意味

文体（モード：  
mode）

語彙・文の選択

ハヤシさん：うまく見つかるといいね！

具体的場面

カトウ先生：そうなんだ。でも心配なのはさ、その子が何を  
考えているのか知りたいし、伝わっているかど  
うかとか、あと、不安じゃないかとか。

ハヤシさん：そうだね。言葉がわからないと、考えているこ  
とや困っていることがこっちも見えにくいし、  
心配になるよね。

カトウ先生：そうなんだよ。学力面も心配になって……。

ハヤシさん：あ、でも、「日本語ができない」ということと  
「学力が低い」ということは一緒ではないんじ  
ゃないかな？

カトウ先生：そうか、確かにね。

ハヤシさん：私たちって、日本にいと日本語だけであれば  
困らないから見えにくいけど、日本語ができ  
ないことは決して「何もできない」ということ  
ではないもんね。その子には母語だってあ  
り、考えだってあるしね。

対比される  
具体的場面

言い換えられた概念的用語

「できなさ思考」とは、いわば「欠損的発想」です。私た  
ちはついつい子どもたちの「できない」ことに着目しがちで  
す。しかしそれは焦りとプレッシャーを教師自身にもたらし  
「できない……だからせめてこれだけは」という気持ちになり  
やすく、子どもたちに対しても、それを示してしまうことも  
多くあります。配慮に満ちた考えともいえますが、一方で、  
漢字の書き取り、計算ドリル、語彙の書き取り、文法プリン  
トのような基礎基本の繰り返しばかりに陥ってしまい、子ど  
ももいつしか「学ぶことのおもしろさ」からも「教室で目ざ  
されていること」から清ざかり、つまらなさをフパイラ  
にはまり込んでしま

言い換えられた対比的概念的用語

必要なのは、勇気をもって「のびる思考」（資本的発  
想）で考えることなのでしょう。子どもたちは実はいろいろ  
な「資本」をもっています。例えば日本とは異なる社会や文

論文であれば deficit / resource という用語を  
入れるがここでは入れるべきだが……



注) 原稿の転載およびイラストの転載は出版社とイラストレーターからの許諾を得て掲載

# 事例① LINE連載記事

媒体

関係性 (テナー)

メッセージ

文体 (モード：  
mode)

マルチモードの選択

教育出版のLINEベースの教育記事 (もともとは800字)

(読み手) 若手の教員

外国人児童生徒を包摂する視点や具体事例, その意味



「母語→日本語」だけではなく、ミンさんにあっただよように、学びの対象となっている言語 (日本語) を学ぶことで改めて母語の再発見につながるようなこともあるんですね。

解説の中に  
登場人物の補足として  
注を挿入

口語的な言い回しを入れる

「どれか一つの言語で完璧に世界に参加する」というのではなく、「もてる言語の全てをフルに駆使しながら、人とコミュニケーションをしたり、考えたり、物事に参加していく」ということを積極的に認めていくことは、外国につながる子どもたちだけでなく、カトウ先生が言うように、転校生も含め、全ての子どもたちにとっての多様な言語と文化を認めていくことにもつながります。

解説の中でも、登場人物  
を引用する

こうした視点で子どもを見ると、子どもたちはみんな「言語的文化的に多様な子ども」と言うこともできます。もちろん、外国につながる子どももみんな。この言い方は、その子どものもつ特性を「のびしろ」「資源」とみなすポジティブな意味合いもありますね。



また、同時にカトウ先生が行っていたように、保護者との地道な対話があったことが、こうした動きをつくったともいえます。

下の校長先生のコメントを読んでみてください。

〈校長先生のコメント〉

ミンさんが学校に来ることになったとき、実は私がいちばん心配したのは、保護者のかたが地域の中で孤立しないかということでした。

保護者の人が同じ言語で安心して話せる機会をつくる必要性を感じたので、校長会などで他の学校の話聞きながら、国際交流協会に相談をすることにしたんです。

別の登場人物によって  
補足的に視点を入れる



限られた登場人物の中でどこまで場面を拡げるか。新しい人物を出すべきか？  
子ども当人の語りを入れるべきか？

注) 原稿の転載およびイラストの転載は出版社とイラストレーターからの許諾を得て掲載

# 事例②：大学院生のリーフレット作成活動（制作中）

媒体

関係性（テナー）

メッセージ

文体（モード：  
mode）

全体の構成

Canvaを用いたリーフレット作成

（書き手）授業を受けた院生 （読み手）若手の教員，悩める支援者

大学院の文献講読（海外の移民の教育ハンドブックの講読）を通して得たことを伝える

リーフレットという紙面の制約

**提起したい視点**

**視点の解説**

**具体的事例**

**観点1の提示**

**観点2の提示**

**観点3の提示**

**観点4の提示**

www.reallygreatsite.com

(表紙)

注) 作成途中のリーフレットは  
受講大学院生の許諾を得て掲載



# 事例②：大学院生のリーフレット作成活動（制作中）

媒体

Canvaを用いたリーフレット作成

関係性（テナー）

（書き手）授業を受けた院生 （読み手）若手の教員，悩める支援者

メッセージ

大学院の文献講読（海外の移民の教育ハンドブックの講読）を通して得たことを伝える

リーフレットという紙面の制約

文体（モード：  
mode）

院生の議論から

提起したい視点

グループ1

多文化・言語ルーツを持つ子どものあるある

参考URL：<https://shuppan.co.jp/li-cooperation/09>

グループ2

外国語の習得に【書くこと】って必要なの？

グループ4

外国にルーツをもつ子どもだけでなくその家庭にも目をむける

概念的な用語化の  
必要性  
その権力性

学術用語として「deficitからresourceへ」とすると簡単。

だけれども、読み手を考えたときにその言い方は余計に権力性を帯びないか？

しかし、「端的な用語化」をしないと、問いかけるだけでは伝わりにくい。

自分たちのような「現場を知らない」院生が「現場を知る」支援者に語る言い方として適切かどうか？

立場と専門知と権力性

# 事例②：大学院生のリーフレット作成活動（制作中）

媒体

Canvaを用いたリーフレット作成

関係性（テナー）

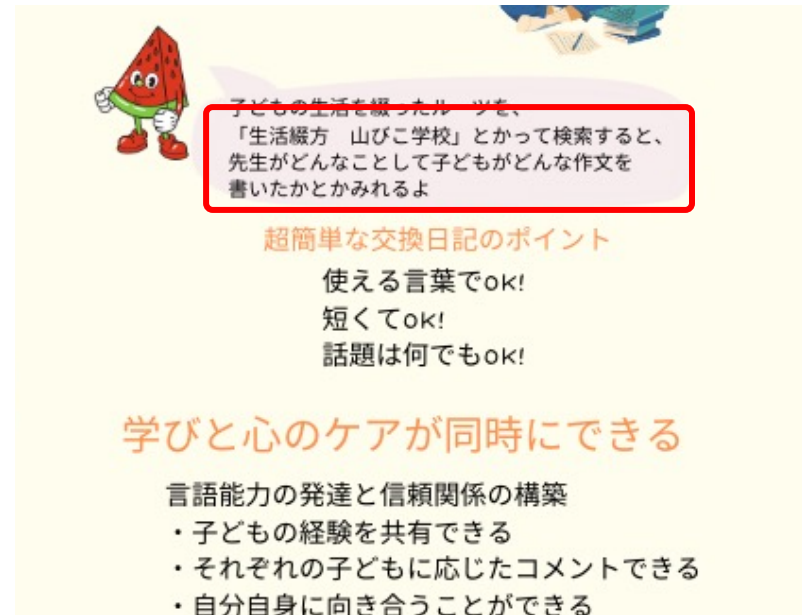
（書き手）授業を受けた院生 （読み手）若手の教員，悩める支援者

メッセージ

大学院の文献講読（海外の移民の教育ハンドブックの講読）を通して得たことを伝える

文体（モード：  
mode）

## 院生の議論から



子どもの生活を撮ったカメラ、  
「生活綴方 山びこ学校」とかって検索すると、  
先生がどんなことして子どもがどんな作文を  
書いたかとかみれるよ

超簡単な交換日記のポイント

- 使える言葉でok!
- 短くてok!
- 話題は何でもok!

学びと心のケアが同時にできる

言語能力の発達と信頼関係の構築

- ・子どもの経験を共有できる
- ・それぞれの子どもに応じたコメントできる
- ・自分自身に向き合うことができる

「ダイアログ的な発想でのアイデンティティを出せるライティング活動」の重要性を伝えたいがそれは紙幅の中でどう感じさせるか？

そもそもの事例の示しかた

今の時代の現場の先生に「生活綴方」「山びこ学校」という語彙の選択では伝わらないのでは…？

概念的な用語化における選択

「交換日記」という用語選択であるべきか？

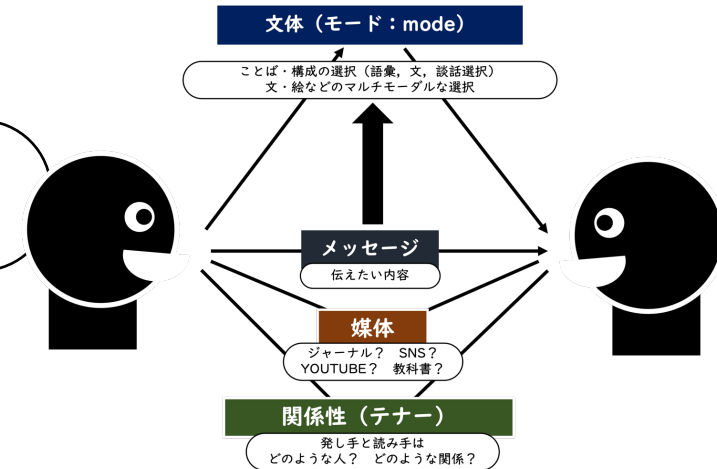
# 論点① 不安定な関係性と媒体の中で知はいかなる文体選択の迷いを生むか？

概念的な用語化を関係と媒体の中でどう選択していくか？

論文であれば deficit / resource という用語を入れるがここでは入れるべきだが……

しかし、「端的な用語化」をしないと、問いかけるだけでは伝わりにくい。

「交換日記」という用語選択であるべきか？



概念的な説明と、具体的な提示をどう関係づけるか？

「ダイアログ的な発想でのアイデンティティを出せるライティング活動」の重要性を伝えたいがそれは紙幅の中でどう感じさせるか？

今の時代の現場の先生に「生活綴方」「山びこ学校」という語彙の選択では伝わらないのでは…？

限られた登場人物の中でどこまで場面を拡げるか。新しい人物を出すべきか？子ども当人の語りを入れるべきか？

発し手と受け手の間の知の権威と権力をどう考えるか？

自分たちのような「現場を知らない」院生が「現場を知る」支援者に語る言い方として適切かどうか？

学術用語として「deficitからresourceへ」とすると簡単。だけれども、読み手を考えたときにその言い方では余計に権力性を帯びないか？

「発し手」と「読み手」の関係性、また「媒体」自体が持つ特性や制約の中でメッセージの「あるべき文体」は揺らぎ、ベターな言語の選択とその葛藤が常に生まれている

# 論点② ジャーナルや学会の内部は「安定」な場か？

「発し手」と「読み手」の関係性、また「媒体」自体が持つ特性や制約の中でメッセージの「あるべき文体」は揺らぎ、よりベストな言語の選択とその葛藤が常に生まれている

社会

学会

例えば

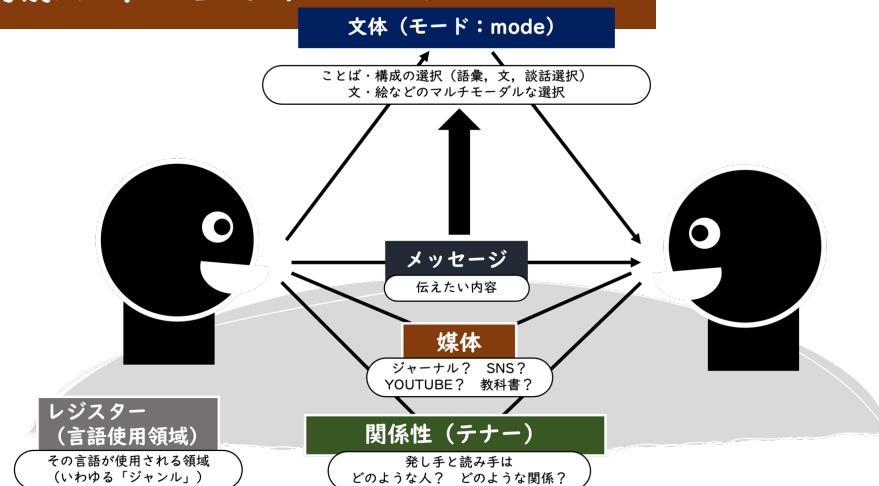
文字と文章で埋め尽くされた  
スライド・プレゼンテーション

例えば

大量のフルペーパーのレジュメ  
を読み上げる発表スタイル

例えば

文章による知識提示と論理展開  
で構成される大学入門教科書



## 読み手のゆらぎ

教員の知の獲得や構築の仕方の変化

若手教員の増加

障害を持つ読み手, 日本語が母語では  
ない人の読み手

学習や媒体のスタイルの多様化

## 発し手のゆらぎ

学問共同体への参加がゴールではない

教職大学院の増加

現職教員のリカレントとしての大学院

障害を持つ人, 日本語が母語ではない  
人も語る

## 媒体のゆらぎ

メディアの多様化

カラー化, リンク化

双方向性のメディア

マルチモーダル化

「紙」ではない媒体

「文体の選択」はこれまで先輩からの継承などが主であり, あまり意識的に検討はされてこなかったが……?  
こうしたことをふまえた「学会」としての場の設定が必要なのではないか?

# 学会の議論の「場」を複線的・民主的に開き、「学会の言語」の文体を鍛える

## 学校教育系学会のプログラムでのくふう

「口頭発表」中心による「紙」ベースの伝達の発表をどうひらくか

- シンポジウムや課題研究は学会主催側からのトップダウン
- 自由研究＋ラウンドテーブル ラウンドテーブルは横並び1つだけの選択
- ポスター発表などの参加型，双方向型の場が少ない
- ダイバーシティへの配慮が少ない（育児，手話，言語などのバリア解消の議論自体がない）

## ウェブサイトや企画としてのくふう

学会員だけではなく，社会的民主的な教育の議論を提起するコミュニティスペースとして

- 例 言語文化教育研究学会のウェブマガジン「togaru」

委員企画だけではなく，会員から出る企画を提示できることの重要性

## ジャーナルの中でのくふう

- 【投稿の枠】の複線化の検討
- マルチモーダルな資料への対応（実践動画にリンクが貼られるなどの検討）
- 翻訳機の向上による多言語展開